

# 支部通信

日本山岳会山梨支部 第3期第9号  
令和2年(2020年)12月21日

## 第61回木暮祭を開催

北杜市須玉町の金山平で10月18日、61回目の木暮祭が開かれた。碑前で式典を行ったが、増富ラジウム温泉郷観光協会のご厚意による恒例の「ほうとうを楽しむ会」は、新型コロナウイルス感染防止のため実施見送りとなった。

金山平北の高台に建つ木暮理太郎顕彰碑前には県内各地から25人が集まった。式は古屋寿隆支部事務局長の司会で進行。観光協会の小森良直事務局長が開会の辞を述べた後、県山岳連盟と本支部代表があいさつした。小宮山稔岳連会長は、「コロナ禍下にあっても、木暮理太郎の奥秩父への功績を忘れないために碑前祭を実施することに意義がある」と述べた。北原孝浩支部長は、「かつて故八巻恭介観光協会長が『金峰山は実に立派な山だ。(中略) 何処へ放り出しても百貫の貫禄を具えた山の中の山である』という文章を引用して、木暮翁の金峰山と増富への愛情について紹介したことを覚えている。翁の心をいつまでも語り継いでいきたい」と語った。また内藤順造支部顧問は、県立文学館報第111号を配付。昨年文学館が収蔵した、盟友・田部重治宛ての木暮の書簡2通を紹介。このうちの1通は、笛吹川東沢の森林伐採によって東沢の幽邃が失われてしまったことを嘆いた内容で、奥秩父の自然保護を考える上で貴重な資料だとした。



あいさつする北原支部長

木暮碑は周囲をシラカバ林に囲まれた高台にある。3年前、県が碑の東側の樹林を幅10メートルあまり切り開いて碑の正面に金峰山を望むことができるようにしたが、早くも幼木が育って展望を遮るようになっていく。先の木暮書簡とは矛盾するが、木暮碑から金峰山を仰ぎ見る展望の維持が期待される。金峰山を愛した木暮翁も、これに異論はないと思われる。(矢崎茂男)

## 全国山岳古道調査の計画

日本山岳会は令和7年(2025年)に創立120周年を迎える。令和元年(2019年)9月支部合同会議で、記念事業として「全国山岳古道調査」を実施することが決まった。100周年の際は「日本列島中央分水嶺踏査」を実施したが、それに次ぐ事業である。山梨支部では理事会で検討を進め、2020年4月の支部総会で山岳古道調査委員会を設置した。その後、令和2年9月の支部合同会議で詳細な調査ガイドブックが提示されたのを受けて、11月25日、第1回古道調査委員会を開催した。

プロジェクトの目的は、全国の山岳古道を文化的、歴史的、地理的な側面から探索、調査し、実際に現地を歩いて調査・記録して、その情報を後世に残るような形で公開することである。また、一般に忘れられている山岳部分の多い廃道を選定し、観光化した古道は避けることが原則である。山梨支部として調査対象となる古道には、甲斐九筋と呼ばれる街道、信仰登山・参拝道、そのほかの山岳古道があげられる。

- ・甲斐九筋：若彦路、中道往還、駿州往還、鎌倉街道※、秩父往還、青梅街道、穂坂路、逸見路、棒道※ (※は文化庁「歴史の道100選」に選出されている古道)
- ・信仰登山：富士山、鳳凰山、金峰山、甲斐駒ヶ岳、北岳
- ・山岳古道：南アルプス北部早川(野呂川)流域古道、その他

山岳古道調査委員会は、①金峰山古道、②早川流域古道(峠越え)の二つを本部に推薦し、調査を進めることにした。

- ①金峰山古道：甲斐國志によれば参拝道は9口ある。信州側にも参拝道1道がある。これらの参拝道を一道として調査する。
- ②早川流域古道(峠越え)：早川流域に入る古道(峠道)は多く、さらには大井川への峠道につながるものもある。これらを合わせて一つの古道として扱う。

今後のスケジュールは次の通りである。

2021. 3 山梨支部が調査する古道を本部へ推薦し決定

2021. 4～2024. 3 古道調査実施、報告書・各種情報のデータベースを作成

2021. 4～2025. 10 JAC本部がホームページ制作（web掲載）、書籍制作（大澤純二）

## 支部山行報告

**【五里山】** ■山行日：令和2年(2020年)10月18日(日) ■地図：2万5千図・瑞牆山

■行程：金山山荘キャンプ場－登山口－思索峠－西峰－東峰－薙山－登山口－金山山荘キャンプ場

■参加者：古屋寿隆、磯野澄也、北原孝浩、渡辺峯雄、荻原賢司、臼田昌美、矢崎茂男、上田謙治、高野正明、中川恵美子、相川修、福田直樹、井口功

感染症対応のため自粛していた今年度第1回支部山行を実施した。目的地は北杜市須玉町増富の五里山。五里山登山は、木暮祭に合わせて何度か実施しているが、今回はこの山の複雑な稜線の内、北半分を踏破しようと古屋山行委員が計画した。13人の参加者を得て、充実した山行になった。

この山の紀行を最初に発表したのは横山厚夫さんと思われる。『一日の山・中央線私の山旅』（1986年、実業之日本社）所収の「五里山」がそれである。ある年の1月、横山さんは行きつけの山宿である金山の有井館を訪れ、同行の望月達夫さんと共にこの山を目指した。五里山は、有井館の正面にこんもりと立つ里山だが、実際にはなかなか手強い。横山さんらは誤って1640メートルの薙山に登ってしまい、一端下ってからルートを再確認。ようやくのことで1673.4メートルの三角点峰に立っている。帰京後横山さんは、故山村正光さんにこの山行の顛末を書簡にしたためて送った。すると山村さんから次のような山名の教示があったという。「五里山は五輪山の転訛でまわりの五つの峰の総称であり、三角点峰はとくに人神山の名がある」。現在私たちは、この教示に従って五里山をとらえているが、「人神」とは三角点の点名であって、地元では「向山（むかいやま）」と呼んでいるのでこの山名を使っている。

金山山荘キャンプ場に立つシラカバやカエデが、昨日の雨に洗われて鮮やかだった。樹間には初冠雪した金峰山が毅然とそびえている。

8時15分に出発し、金山沢を渡って林道を東進。廃棄林道入口から踏み跡をたどる。堰堤を二つ越えた先の谷筋が尾根への登路になっているが、2万5千図にはこの谷が描かれていない。初めて登る際は注意を要する。登り上げた鞍部は大小の露岩が並び、木漏れ日がやわらかく差す心地よい休憩地であって「思索峠」と呼ばれている。ここから明瞭な尾根道になり、1730メートルの西峰を経て東峰に立ったのは10時。標高1740メートル、五里山の最高点である。東が懸崖になっていて近づく足がすくむ。



東峰を辞して西峰の基部を右から巻く。その先でヤブ尾根を北に下降。シャクナゲのブッシュに辟易しながら辿り着いた薙山で昼食にした。沢を隔てて向山・思索峠・西峰が錦繡をまとっている。めいめい写真に収めたり、この山の地形の複雑さや登山対象としての面白さなど話は尽きなかった。

キャンプ場に1時過ぎに帰着。ほどよい疲労感が残る充実した第1回支部山行だった。（矢崎茂男）

**【たいら山】** ■山行日：令和2年11月28日(土) ■地図：2万5千図・市川大門

■行程：農村公園駐車場－関原口登山道入り口－関原峠－たいら山山頂－山之神神社－山道入り口－山之神登山口－農村公園駐車場

■参加者：渡辺峯雄、池田新二郎、北原孝治、大澤純二、小宮山千彰、磯野澄也、高野正明、山村正人、福田直樹、相川修、大澤さな枝、上田謙治、三輪田佳子、渡辺秀子、杉山健一

朝、我が家の大泉はみぞれ、後ろの八ヶ岳は雪化粧。心配しながらの出発だったが、間もなく青空に変わりホッとす。中央市農村公園駐車場に全員が集まり、渡辺リーダーから名簿と地図とコースの説明を受け、池田サブリーダーの指導で準備体操の後、9時出発。

長屋門のある大きな屋敷や愛宕神社に歴史を感じながらロードを30分程歩くと登山道に入った。思いの外急斜面だがジグザグ道で歩きやすく、枯葉を踏む音が心地よい。途中甲府盆地を見下ろせる所でひと休み。再び登ると路傍に馬頭観音が三体。馬と人足だけが頼りの往来の道だったことが偲ばれる。さらに残る紅葉を楽しみながら一時間程行くと関原峠に出た。左は富士方面への中道往還に通じ、昔は炭や物を甲府へ運ぶのに使われたそうだ。一休みの後私達は右に折れ、南の尾根越しに富士山の

頭を見ながら、たいら山を目指す。

傾斜も緩くなり、11時50分、広く平坦な山頂に着いた。雪化粧を始めた北岳や南アルプス方面と、甲府盆地一帯を眺めながら昼食。コロナ禍のさなか、密を避けてそれぞれ離れてとるが、何だか淋しい。遅れて到着した男性に全員の記念撮影をお願いし、12時30分、山乃神・千本桜コースに向け出発。急な下りもなく、林道に出てしばらく行くと山乃神社の標識。右に折れ13時、社殿前に出た。それぞれ



参拝する。かつて春には満開の桜が麓から連なり沢山の参拝の人で賑わったそうだ。今は山桜も古木となり、枝ぶりも元気がなく淋しい。何とか賑わいを取り戻せたらと思う。

道はガレ石が多く歩きにくい。足が不調の一名、緊張しながら頑張る様子が痛々しい。すぐに絶景展望台があり、眼下に明るく広がる甲府盆地、遙かに八ヶ岳、甲斐駒、鳳凰三山と南アルプスが望め、なんと気持ちが良いことか！山々を指してはあれこれと楽しい会話でひと休み。天気が良ければ北アルプスも見えるとか。

14時、山之神コース登山口に全員無事到着。集落の畑の作物や、たわわに実った柚子や蜜柑や花梨を楽しみながら、15時、農村公園駐車場に着いた。高低差840メートルの運動で気持ち良く一日を終えた。リーダー、サブリーダーのご苦勞に心から感謝申し上げる。(大澤さな枝)

## 支部山行充実への協力を 山行委員会委員長 小宮山千彰

山行委員会では例年何回かの支部山行を企画・実践してきた。しかし諸行事や登山講座などの日程の関係で、実施回数も登山対象の山も思うに任せない状況だった。加えてコロナ禍の影響によって利用できる山小屋も限られ、本年度はわずかな実施にとどまっている。支部山行は支部の中心的活動である。今後、安心・安全を確保した山行を提案して登山技術の習得を図りながら、会員相互の親睦を深めたいと考えている。山行委員会では、来年度に向けて年間の支部山行計画を検討する。委員が山行案を持ち寄り、魅力的で多様な年間計画を立案したい。

一方で、「やまなし登山基礎講座」の受講修了生に対して十分な山行計画を提供できず、会員増加に寄与できていないことも事実である。この現状を改善すべく支部山行・会員山行とは別に、山行委員会委員や支部員が個人で計画して修了生に参加を募る山行を充実させたいと考えている。山梨支部との関りを深めてもらうことによって会員増加を目指すとともに、登山技術の習得と向上のお手伝いをしたい。個人山行計画の際、この企画にふさわしい内容（難易度や体力度、技術向上期待度等）だと思われるときは、ぜひ山行委員会にお知らせいただきたい。事務局が参加募集などの対応に当たる。なお、この山行は、連れていってもらって受け身の山行ではなく一人一人が何らかの役割を持って参加し、自分の力量を高める山行にしたい。このような実践が、支部の一層の活性化に寄与するのではないだろうか。

支部員各位のご理解・ご協力をお願いします。 連絡先：055-277-3488（小宮山）、055-272-0676（渡辺）

## 新型コロナウイルス感染症禍での活動

### (1) やまなし登山基礎講座の企画と運営

今年度の「第6回やまなし登山基礎講座」は3密を避けるなど新型コロナ感染防止に留意し、受講生を15名に縮小するなどして実施した。

新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が全国に発せられている中、山梨学院生涯学習センターと慎重に協議を重ねた。支部としては山梨学院大学の授業がオンライン形態であるにもかかわらず、この講座が少人数に規模を縮小したとはいえ、対面方式（教室での開講）で良いのだろうか、さらに万に一つ講座でクラスター発生となったら山梨学院さんはもとより受講生にも迷惑をかけやしないかということが最終決定に至るまでも気がかりであった。しかしながら山梨学院上層部から永年にわたる山梨支部とのイベントは継続実施することが望ましいという考えのもと、感染防止のための対応策が示されて、実施のはこびとなったものである。

講座は三密とならぬ対策やマスク着用は当然のこと、受講生および支部スタッフは日々の検温（講座の無い日も検温して記録）、受講生毎に座席定位置指定、講義終了後に使用机を各自が消毒など徹底して感染防止に努めた。

残暑厳しい9月8日に開講。3回の実践登山を含め11日間16講座を実施して、11月17日に無事終了した。(北原孝浩)



## (2) コロナ禍での山小屋利用山行

令和2年(2020年)10月中旬、4回目の槍ヶ岳を目指した。憧れの西鎌尾根。今夏幾度も計画したこのコース。この魅力的な稜線歩きに、何としても好天を願いたい。これまで悪天候で何度小屋にキャンセルの電話を入れたことか。以前なら良い天気思い立ったら行けたのに、今年は予約が無いと泊まらせてもらうことができない。

北アルプスも少し静かになった頃、双六小屋、槍ヶ岳山荘を予約した。新穂高に前泊し、早朝小雨の中をスタートする。双六小屋までは数年前にも歩いている。わさび平小屋の冷やしトマト、冷やしキュウリ、涼しげな風鈴の音 鏡平小屋では赤、黄、緑のかき氷。双六小屋まではとても長い道のりだが、華のあるこの登山道を歩くことが楽しくて仕方なかったことを思い出した。楽しみにしていた鏡池に映る槍ヶ岳を拝むことは残念ながら今回もできなかった。

二つの小屋でトイレをお借りした。感染症予防対策として手洗い石鹸、ペーパータオル、紙コップが用意されていた。宿泊した双六小屋も同じ対策が講じられていた。山で石鹸類を使用する事はタブーだったのに自然破壊より人類の命を守る事が優先されていた。登山者にとっては快適に過ごせてありがたい事だが、そこにあったゴミ箱には紙屑がいっぱい。小屋の負担も大変だと思わずにはいられなかった。

平日だったが多くの登山者がいた。マスクを着用している人はほんの数人。長時間歩くのにマスクをするのは正直辛い。私はポケットにマスクを忍ばせ、すれ違う時にマスクを着用するようにした。疲れてくるとそれも面倒になった。そうした時には顔を背けて飛沫がかからないよう配慮にした。自粛後は殆どの登山者がマスクをしていた。今は感染者も増えたというのに無防備になっているように感じた。双六小屋に到着。受付時に検温。小屋内はマスク着用が義務付けられている。部屋はかいこ部屋。上下の段でグループごとに割り当てられた。不織布のシート、枕カバー、襟カバーが用意されていた。布団は一人一組。私と連れはインナーシートを持参したのでそれも利用した。食事は前横で距離を保つために互い違いに座るように工夫されていた。こちらのグループの感染症予防対策は徹底されていて、安心して過ごさせてもらう事ができた。



山小屋の工夫・配慮

翌日は雲一つない秋晴れになった。まずは双六岳へ。スキップしたくなるほどの広い大地、山頂からは裏銀座の山々が美しく聳えている。その絶景を背にすると正面には槍ヶ岳が鎮座していた。これが槍ヶ岳へ向かう滑走路か。なにかまるで宇宙にでもいるかのような不思議な空間を感じた。これからあのとんがりまで歩かねばならない。樺沢岳に上がると強風の洗礼を受けたが、憧れのこの稜線歩きはわくわくの方が優位にたつた。千丈乗越までのアップダウンの繰り返しはハードでばてた。そしてすぐそこに見える槍ヶ岳には中々辿りつく事が出来ない。やっとの思いで山荘に到着。こちらでは検温はなかった。部屋はかいこ部屋、上下でグループごとに使用。不織布のシートと枕カバー、襟カバーはなかったのでマスクをして寝た。前泊の小屋と比べると対策が徹底されているとは思えなかったが、小屋に全てを委ねるのではなく私達が意識をもってフォローするべきなのだろう。

最終日、新穂高温泉へ下山。沢山の人が槍ヶ岳を目指して登ってきた。来年の登山シーズンは一体どうなるのだろうか。こんな騒ぎから早く解放されて「こんにちは」と笑顔で挨拶できる安全な登山ができるようになってほしい。(黒沼英美)

## 理事会報告

- 7月 7日 古道踏査委員会の設置等検討、第6回やまなし登山基礎講座計画確定、個人山行充実の検討
- 9月 3日 登山基礎講座におけるコロナ対策検討、第61回木暮祭・支部山行の実施計画確認
- 10月14日 登山基礎講座修了証書発行基準見直し及び来年度講座開催について検討、支部合同会議報告(山岳古道調査)報告・古道調査実施案・委員再募集等検討、支部通信第3期9号内容検討
- 11月11日 今年度の支部山行予定、第1回古道調査委員会確認、登山基礎講座の開催時期等検討

編集 矢崎茂男 (広報担当)

住所：408-0114 山梨県北杜市須玉町藤田502 TEL：090-7734-2788

Eメール：yazaki-s@taupe.plala.or.jp